

大学生女性アスリートが化粧を行う心理的背景について ～大学生女性スキー競技選手を対象としたインタビュー調査～

コーチング科学研究領域

5023A062-2 松本 祐依

研究指導教員: 松井 泰二 教授

I. 序論

1. 研究背景

著者にとっての化粧行動は、自身のメンタル面の弱い部分を隠す、または補う役割を担っていた。しかし、大学入学後、大学や部活動の規則では化粧行動は禁止されていないのにも関わらず、「アスリートだから」という理由で化粧行動が制限されているような感覚に陥った。アスリートの化粧行動を制限する明確な理由は存在せず、化粧行動をすることで批判を受けることに対し疑問を呈するアスリートたちも増えてきている。

2. 先行研究

女性の化粧行動に対しては研究が多く行われているが、女性アスリートを対象として化粧行動の検討を行った研究は数少ない。特に大学生女性アスリートの化粧行動の実施状況や目的、意義についての個人の深層部分はまだ十分に検討されていない。さらに、先行研究の多くは10から30年以上前の発行となっていることから、近年の化粧行動や外見への意識の変化を反映した検討は十分にされていない。

3. 研究目的

本研究は、大学生女性アスリートが化粧行動をしている心理的背景を明らかにすることを目的とした。そして、大学生女性アスリートの化粧実態を明らかにすることと共に、女性アスリートが化粧をすることについての見解についても検討を行う。

II. 方法

1. 実施方法

化粧をするシーンや心理的状況を深く理解するために半構造化インタビュー調査を採用した。調査実施期間は、2024年9月から2024年10月。インタビュー時間は、それぞれ59分42秒から63分00秒。インタビュー内容は、ICレコーダーに録音する許可を得た上で録音し、後日音声データを逐語化した。本研究は「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理委員会」の承認(2024-081)を得て実施した。

2. 調査対象者

大学体育会スキー部に所属する、大学生女性アスリート4名。年齢は20歳から21歳、主な競技経歴は国際大会出場であった。

3. 基幹的質問

- (1) 自身のシーン別【日常生活、部活動練習、大会出場の際】における化粧行動について
- (2) 自身が化粧行動をすることについて
- (3) 女性アスリートが化粧行動をすることについて
- (4) インタビュー中の重要な出来事については随時追加質問を行う

4. 分析方法

分析方法はナラティブ分析を用いた。まず、録音した音声データをもとに逐語録を作成し、個人情報や個人を特定し得る情報の削除(匿名化)を行った。次に「化粧するシーン別」に分割した。「化粧全般」、日常生活は「近場に買い物」、「都心に行く遊び」、「大学授業」、「高校時代」、「部活動練習」、大会は「レース」、「表彰式」、さらに「女性アスリートの化粧行動について」の9シーンに分けられた。9シーンごとに1)化粧の内容、2)化粧をする背景、3)化粧がもたらす効果、4)化粧に対する考え方について分析した。

III. 結果・考察

1. 化粧の内容

化粧行動は単なる外見の変化にとどまらず、社会的なアイデンティティや自己評価、他者との関わりに深く関連していることが明らかになった。

2. 化粧をする背景

化粧行動は単なる外見を美化する行為にとどまらず、個人の心理的、社会的な状況によって多面的に機能することが明らかになった。ポジティブな効果(自

己鼓舞や気分転換)とネガティブな効果(不安やストレス)を併せ持ち、個人の心理的および社会的適応の一環として位置づけることができる。

3. 化粧がもたらす効果

個々が化粧行動をどのように位置づけているかによって異なるものの、共通して気分転換や自己調整といった心理的側面に関与していることが明らかになった。化粧行動が競技パフォーマンスに与える影響については限定的であると同時に、心理的な支援の重要な手段であることが強調される。

4. 化粧についての言及

化粧行動の背景には個人の社会的な役割認識や自己表現に対する意識の違いが存在することが明らかになった。化粧行動は単一の動機に基づくものではなく、個人の社会的文脈や自己認識によって多様に変化することが示唆された。

5. 総合考察

(1) 大学生女性アスリートの化粧行動実態を明らかにすること

阻害要因は体質や金銭的ならび時間的制約などのネガティブな効果を強く感じ、促進要因は公的な場面における身だしなみや化粧行動による気持ちの変化、大会に臨む時のルーティーンとしてなど、化粧行動のポジティブな効果を感じていると考えられる。

(2) 女性アスリートが化粧行動をすることについて

メディアや SNS などへの露出や社会的に期待される「アスリート像」を維持するための手段、大会に向けた気合いやモチベーションの向上などが考えられる。さらに、有名女性アスリートや周囲の大学生女性アスリート、競技特性で化粧行動をする競技への理解や興味が見られた。一方、コーチや一般社会からの「言葉」が女性アスリートの精神的な負担になる可能性が示唆された。

(3) 一般女子大学生としての役割と女性アスリートとしての役割の二面性

一般女子大学生としての役割と女性アスリートとし

ての役割の二面性があり、あらゆる場面や所属組織に適応して2つの自分を使い分けしていると推察される。この二面性を使い分けるスイッチになっている。

化粧行動をする際には、「対立する存在」や「社会的期待」、「外部からの圧力」に配慮して行われていることが示唆された。この「対立する存在」や「社会的期待」、「外部からの圧力」によって化粧行動の有無や程度が変化し、時には弱い自分(対立する存在)を鼓舞する道具として、時には一般社会からの視線や攻撃(社会的期待や外部からの圧力)を和らげる武器として使い分けしている可能性があると言えよう。

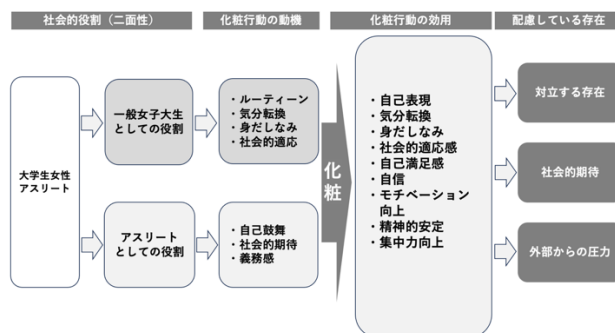


図1 大学生女性アスリートが化粧行動をする動機、効用ならびに化粧行動の際に配慮している存在についての概念図

V. 結論

大学生女性アスリートは、高校生から社会人への移行期のなかで「社会人としての身だしなみ」という一般的な流れに加え、「アスリートとしてあるべき姿」までも求められる。さらに、女性アスリートとしての「シンボリック的存在」、「競技の普及拡大」なども関係し、複雑化していると考えられる。大学生女性アスリートにとって、化粧行動は、女子大学生としての役割と女性アスリートとしての役割の二面性を使い分け、様々な存在に立ち向かうための武器の1つになっていると結論づけられる。

VII. 本研究の限界と今後の展望

本研究で調査対象者は学生日本代表や日本代表として国際大会出場の経歴を持ち、その競技のトップ選手を対象としたものとなった。また、個人種目を対象とした4名の大学生女性エリートアスリートの化粧行動にとどまった。一般的な大学生アスリートの化粧行動とまでは言い切れない。